2015年7月9日

われ夢みる村

The Experimental Village:
An approch To Global Problem
Based on Agrarian Values
地球的課題の実験村

第63号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

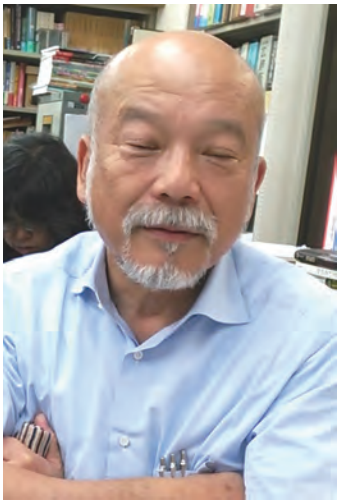
百姓百生　その５７

中里英章さん

七つ森書館代表・成田プロジェクト

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

三里塚に最初に足を運んだのは１９７１年の第１次代執行ですね。２月の終りだったですかね。寒かった。意気地がないんでなかなか踏み切れなかったんですが、逮捕者が出て、これは行かなきゃと思って。東京都立大（現、首都大学東京）の化学科の学生で、高木仁三郎（たかぎじんざぶろう）さんは助教授だった。６９年４月に入学して、高木さんは７月に赴任してきた。東大から助手共闘のすごいやつが来るという噂がたってましてね。彼はすぐ職員反戦に加わって、職員も教員も一緒になっての動きをつくり出し、学生とも割と一緒になってやった。



当時都立大は民青が圧倒的に多くて、一元支配みたいなところがあった。だから朝のビラまきでも大変で、１人で１０人くらい相手にしなければならなかった。安田講堂が６９年１月で、都立大は遅れて６月からバリストになったんですね。１１月に封鎖解除になった。真面目に学生稼業をやる気もなくなって、単位だけはとって後はバイトに明け暮れていた。

７１年は第１次、第２次強制代執行、続く７２年鉄塔建設と三里塚は激動のときで、行きっぱなしという感じだった。三里塚に行くと決めて、高木さんに相談に行ったことを覚えている。高木さんは三里塚へはずいぶん前から行ってたんですね。ノンセクトの運動体では樋ヶ（ひのけ）さんと一緒だった。青年行動隊の三の宮文男（さんのみやふみお）のことはよく覚えている。いい男でね、みんなに慕われていた。彼の遺書はショッキングでした。東峰事件の後の弾圧はすさまじかったですね。鉄塔建設は大きなものを扱うから、現場経験がないと無理なんですね。アルバイトでその経験があったので、１ヶ月くらい張りつきましたかね。バイトが出来ないから食うのが大変だった。

鉄塔を建てた職人さんがいい人で、その後雇ってもらった。ビルにエレベーターを据え付ける仕事で、１年くらいで仕事を覚えたら独立してやれといわれましてね。当時、仕事はいくらでもあった。儲けました。全部飲んでしまった。それもやめてぷらぷらしていたら、高木さんが声をかけてくれて、生まれたばかりの原子力資料情報室で働かせてもらった。情報室には７７年から７９年までやっかいになったのだけど、高木さんの期待は裏切ったんじゃないのかなあ。肉体労働やっていると数式も英語の単語もみんな忘れてしまうんですね。その後、総会屋っぽい出版社で２年くらいご厄介になって仕事を覚えて、もうひとつ出版社を経由して七つ森（ななつもり）書館を立ち上げます。８５年でした。私が情報室をやめて１週間後にスリーマイルの事故がありましてね。辞めるのは少し遅れていたらそのまま情報室にいなければいけなくなって、七つ森もなかったでしょうね。

七つ森の最初の本は高木さんと前田俊彦（まえだとしひこ）さんの対談本でした。二冊目が高木さんの『チェルノブイリ　最後の警告』、三冊目が高木さんと花崎皋平（はなさきこうへい）さんの対論。この三冊で方向が決まったですね。

私にとって、三里塚経験はその後の生き方を左右するほどのものでしたね。特に“現場に立つ”ということの意味を教えられた。東京生まれの東京育ちですから、村に入ったとき本当に驚きましたね。文化やくらしもそうですが、青年行動隊のひとに会っても、なんていうかぺらぺらしていない。原発問題をやるときでも、まず現地、ということが身体に染み込んだ。

（大野和興）

あの大震災が気付かせてくれたこと

ＪＶＣ第三期インターン生（芦川雄一郎さん）からの手紙

２０００年をはさんでタイに行っていた私は、その前後に三里塚でお世話になりました。当時、柳川さんと、こんなやり取りをしました。

柳川「農家は大変だよ」、芦川「大変でもやります！」。

私は大変気負っていたので、負けん気でこうした発言をしました。ただ、今以上にひよっこで、三里塚に生きるということに正面から目を向けてはいなかったように思います。「農家は朝から晩まで大変だなぁ」という印象だけが残り、実はそれ以上に強い印象を与えたであろう空港に反対してきた今日までには、語られたとしても教科書を読んでるいるように現実感がなく、自分には場違いのような気もしていました。

今でこそ言えますが、私は恐かったのだろうと思います。バリケードや団結小屋などの言葉のイメージが、日常から離れた血の匂いのするもののように感じられ、道理はさておき、私には太刀打ちできる事柄ではないと思っていた気がします。

＊

そして大震災と原発事故。夫婦と娘に８ヶ月後には２人目が誕生して４人になる家族は、着の身着のまま同然の１ヵ月の避難生活の後、群馬へ岡山へと移住また移住を余儀なくされました。その間、いろんな事を考えました。最初は放射能のこと、次に何故原発をやめないのか。そして原発のことを考えると、社会の色々なありようについても考えざるを得なくなりました。国、政治、経済、憲法、日米安保、沖縄…そして人、自然。

震災前は漠然としていた「自然を壊さない」「他者との共生」「持続可能な生活」といったことが、震災後にわかに現実味をもって捉えられるようになりました。原子力を鎮めなければ人が生きられない地が増える。生活を見直さなければ、今の経済システムでは大切なものが失われ、弱いところにしわ寄せが行く。日本が戦争に直接参加することになる。どこかに未来への抜け道が、壊すべき壁がないかと考えると、それは私たち一人一人の考えや生活以外にはないと思えるのです。充分に状況が判っていなかったり、生活の糧を他人に握られて身動きが取れず、考え出す事も出来なかったり…。

その中で他人同士が意見を述べあい、道を探るにはどんな方法があるのか、何を言えば良いのか悪いのか、どんな了解の下で話し合うのか、そんな人間関係のありようも考えるようになりました。

＊

震災前は、社会問題について「まず自分の出来るところから」と、自給自足を基本にした農的生活を築きつつあったところでした。震災後もそれは変わらないのですが、思っていたよりも私は、この社会の一員であると感じるようになりました。私たちの生存基盤が崩れるてしまうのが、そう遠くない先であるようにも思えました。

子ども達に対する見方も変わりました。普通は私が死んだ後の世界を私より若い世代が生きて行くのですが、私は自分なりに生きながら、次の世代にバトンを渡す存在なんだと思うようになりました。そう考えると、よその子が「うちの子」に近づいてくるような気がします。私は、社会や他人にちゃんと働きかけなければ後悔するかもしれないと思うようになりました。

こう考えるようになったとき、三里塚で、沖縄で、理不尽なものに立ち向かってこられた方々が以前より身近に感じられるようになりました。なんとなく、全部じゃないけど、僕にもわかる気がする。多分…ですが、不利な条件の下で何か自分の考えや意見を述べるとき、人はその事柄において筋を通すことそれ自身が目的ではなく（例えば基地を作らせない）、結果はどうあれ自ら立ち上がり、筋の通ったことを述べる、その行為その姿勢を周囲と続く世代に見せる、そうしたことも大切で次につながることなのだろうと、いま思っています。

村民からの手紙

地球的課題の実験村のみなさま、お久しぶりです。いま、私は愛知の岐阜との県境で木曽川に近い岩倉市に住んでいまして、この手紙を書いています。

実験村発足の頃は日本消費者連盟の事務局で働いていましたので、時には農地を守る農民魂の希求する地球的課題の村民合宿や年次寄り合いに参加できました。実験村の「夕立の森」の林の掃除に行ったのは１回、バスツアーで東峰の森のタケノコ狩りや、収穫祭などの催しの度に三里塚の大地をめぐり、木の根ペンションに立ち寄りました。

実験村の「麦大豆畑トラスト」には参加できませんが、ここでは遺伝子組み換えいらないキャンペーンに賛同して始まった「流域自給をつくる大豆畑トラスト」が、木曽川流域の農地を耕す農家を支え、下流域の水環境を守る活動を続けています。希望者には枝豆の発送があって人気が高いようです。

もう一つ私は大豆作りに加わっています。７年前に、「水源の里を守ろう　木曽川流域みんみんの会」が発足して、荒廃が深刻な木曽川水系の森林や里山、水系を守るための住民運動を試行錯誤していますが、木曽川の源流、木祖村で畑を借りて大豆作りを始めました。５年目の今年、７月は草取りの最中です。実験村と同じく味噌などの加工品にも挑戦中です。

いまは私は畑まで行くことはできません。三里塚闘争の農民魂が農地を守りたい私の中の原点に触れて以来、三里塚と私の今日があります。実験村の村民として、地球的課題はますます深く解きがたいものですが、まずは、通信で結ばれている村民からのたよりといたします。

２０１５年７月

水原博子

夕立の森　森づくりに参加して

蛙を捕まえる２歳の息子。都内で暮らしている私たちにとって、めったに出会わない遊び相手。しかし“ケロコくん”は手のひらに収まろうとせず、ジャンプ。逃がすまいと阻止する息子。暫しの攻防の末、「つぶれちゃった！」

小さな動物に力をかけすぎると悲劇も起きてしまう。少々かわいそうに思えるが、怖がって泣き出すより余程いい。わんぱくな一面を見られて安心。成長する過程には大事なこと。

小学４年の娘はポリタンクからやかんに水を移し、マッチを擦って薪に火をつける。そして包丁で野菜を切り味噌汁の準備。食事が終われば、同じポリタンクの水で食器を洗う。水の配分、火の扱いや始末、森ではひとつひとつが大切になる。普段、口にしている自然の恵みは多くの人の手がかかっている。電気、ガス、水道水だって無限ではない。

ここで気付いたこともあるはず。自然と共存すること。長い歴史でほんの百年前までは当たり前のこと。しかし現代を生きるわたしたちは体験していない。「土の上を歩く」そんなことすらも日常ではない。緑の木々、花や虫、風の匂いに季節を知る。

夕立の森の活動に参加したのはまだ２回だけですが、子どもたちには「感じる力」を養って欲しいと思っています。

福田邦宏

木の根ペンションと自然分娩

ｙｕｚｏ

　みなさんこんにちは、ｙｕｚｏといいます。はじめまして。四年ほど前に原発事故がきっかけとなり、東京から今住んでいる島根県浜田市弥栄町に家族で移住しました。今現在は兼業農家として胡散臭く生きのびています。そしてこの間の二月、無事に二人目の子供が産まれ、家族が増えました！　ありがとうございます。今回はその時の出産にまつわる話を書かせていただきます。

　二人目の出産に当たり、僕もパートナーも自然分娩を希望していたのですが、家の近くにはそういった助産院が皆無だったため、パートナーの実家（千葉県の神崎町）に近い助産院にお世話になる事を決め里帰り出産という形になりました。その際、僕も出産前後一ヶ月くらいパートナーの実家にお世話になろうかと安易に考えていたら、諸事情により僕だけキャンセル喰らうという謎の展開に。

　出産マニアの僕ですので「こりゃ出産立ち会い無理か！？」と絶望しましたが、一時間後には自分の持ってる人脈をフル活用して出産前後の日程は三里塚の木の根ペンションに滞在可能というところまでこぎつけました。ＴＨＥ不屈の民。

　そして実際に二月に入って島根から千葉入り。嬉し懐かしの木の根ペンションへ。昔、洞爺湖サミットがあった年にここで反Ｇ８のイベントを企画したので、色んな思い出が一遍に蘇って感動でした。しかもペンションの最寄り駅に着いた僕を車で迎えに来てくれたのもその時にとってもお世話になったＨさんで、久々の再会。逆に実家キャンセル喰らって良かったと思いましたね。

　そして出産予定日近くになり、三里塚ワンパック野菜の味噌作りのイベント（その日は麹づくり）でガッツリ働き飲んだくれた翌日の夕方頃に陣痛が！？　またもやＨさんの軽トラにて多古町の助産院へと直行！　よかったー、まだ産まれてない。一人目の子供とも合流し、二人で一緒にパートナーに念を送り、言葉を送り、そして助産院に着いてから約二時間後、元気な男の子でしたー！　一人目の時と同様にワタクシ号泣。五分間くらい泣きまくりでした。あらためて、出産っていうものは一番感動するものだなぁと実感いたしました。

　そして現在、無事に家族全員で弥栄町に戻りてんやわんやな生活を送っています。あの出産を経て、三里塚との縁がまた復活したような気が個人的にはしていて、この度こんな風に原稿まで書かせていただいて。

　実家キャンセル喰らったところから全ては導かれていたと確信しています。すべてに感謝！

　ありがとうございました。

三里塚の現在と過去を訪ねて
ＰＡＲＣ自由学校による訪問記

２０１５年６月２７日から２８日、ＰＡＲＣ自由学校の「民衆思想の１００年」という講座を受講する受講生１８名と、講座を企画・運営するスタッフ（現在これを書いているわたし大和田のことです）、案内人として大野和興さんも加えた、総勢２０名で三里塚を訪れました。

この講座は、２０１４年から約２年がかりで、戦前・戦後における人びとの抵抗の実践やそこから生まれた思想や詩などを学ぶという主旨で取り組まれてきたものです。受講生は２０代から７０代まで幅広く、中には若いころ三里塚に何らかの形で通っていた、この地に何十年ぶりにやってきました、という方も何人もいらっしゃいました。

普段は、東京のＰＡＲＣ事務局が入っている建物の会議室で、座学のような形式でやっていることが多いのですが、今回は現地訪問、合宿という形です。初日に、大津幸四郎（おおつこうしろう）さんの遺作となった映画「三里塚に生きる」を観て、柳川さん、平野さん、大野さんのお話をうかがったのち、夜中まで交流会。翌日は三里塚物産や市東（しとう）さんの畑、樋ケ（ひのけ）さんの鶏舎を訪ねたのち、三里塚ワンパックで石井さんと伊藤文美さんのお話をうかがいました。

「昭和の大闘争」として、多様な立場の人が入り乱れて闘われた時期のこと、さまざまな出来事やその渦中での模索、現在のそれぞれの考え方・日々のあり方など、非常に重たく多様な要素に出会い、感じ取る中で、受講生もなかば圧倒されて、最後はいくらかボンヤリしていたようでした（わたし自身も含め）。

合宿から帰ってきて、受講生の何人もから、行けて本当に良かったというメールが届きました。はじめて三里塚について知ったという若い受講生は、これからも何らかの形で関わりたいので、とりあえず今度あるお祭りに行くつもりだと言っていました。受講生もわたし自身も、この後の講座の中でも、そしてこの後の人生の中でも、今回の合宿で受けとめたものについて考え続け、問い直し続けていくのではないかと思います。

受け容れてくださったみなさん、本当に、本当にありがとうございました。

ＰＡＲＣ自由学校　大和田清香（おおわだあやか）

自然の時間の操作は、できない

柏崎刈羽原子力発電所

前号で山下茂さんが、７０年代から現在に至る半世紀近い時間の流れの中の、三里塚と柏崎の対比を簡潔に示してくれた。そして、地域自立のエネルギーに巨大な原発は要らない、三里塚と柏崎とで人と人の交流をはかりたいと、運動の方向を提起した。

それを受けて、思うところをのべてみる。

地球的課題の実験村は、農的価値をとり戻し、持続可能な社会の実現をめざしている運動だと理解する。そこで大本となる考え方は、「循環」が可能かどうかにある。モノだけではなく、いのちの循環が一番の大本にあって、モノもエネルギーもこの大本の上にあるいくつかの柱にあてると考えたい。

フクシマ、と敢えて書くが、は、あらためて実験村の運動の意味を教えている。福島第一原発の過酷事故で、大量の放射性物資が環境にばらまかれた。その放射能がいのちの循環を絶ち、くらしも、人々の関係も断ち切ってしまった。山や森は元に戻らない。いや、６００年ほどの時間を待てば、山や森じたいは戻るだろう。それまでの長い年月、山や森と人々との関係は断ち切られたままになるのだから、元に戻るのではない。

放射能を消去する科学・技術は無い。放射能の寿命を短くする研究は無いわけではないが、実用になる見通しは無い。時間が過ぎるのにまかせて、半減期に従って自然に放射能が減衰していくのを待つしかない。除染という言葉は、誤解を与えやすい。濃く汚染された場所から、多少の放射性物質を他の場所に移すだけである。移されたさきの場所で自然減衰を待つ。放射能を扱う科学・技術が生命系と相容れない世界であることは疑い得ない。フクシマが、このことを一般の人たちに広く知らせたわけである。

２０世紀に現代科学が成立してくる中で、原子核を壊して莫大なエネルギーを取り出す知識を人類は手に入れた。ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾として姿をあらわし、その後は核兵器と原子力発電に多用されている。太陽光や太陽熱、地熱、風力、バイオマスなどによるエネルギーとは比較にならない高密度のエネルギーが核エネルギーである。しかも、放射能と切り離せない。だから、このエネルギーには農的価値は全く無い。むしろ、大きくマイナスである。工業的社会にとってはしごく有難いエネルギーではある。地域自立とは真っ向から対立する中央政府支配の構造にとって便利なエネルギーである。

新しい知識を使いたがるのは人間の性だという説があるが、それを禁じることが必要になった、と私は考える。だが、知的進歩を否定するのか、と批判される。そういう進歩は迷惑だ、要らないんだ、という声はか細い。実験村の人たちはどう思いますか？

原発を運転すると、たくさんの核分裂物質ができてしまう。その多くは放射能を帯びていて、死の灰と呼ばれたりする。絶対に環境に漏らしてはいけないモノである。柏崎刈羽原発には７基の原子炉があり、一ヶ所での総発電量では世界最大である。今停止している全７基のうち、６、７号機の２基には最新型の原子炉が装備されていて、発電容量も１基で１３５．６万キロワットという大きいものだ。東京電力はこの２基を再開させたいと、あの手、この手で地元に攻撃をかけてきている。

だが、３・１１によって、原発の「安全神話」は完全にくずれた。フクシマのような、あるいはそれ以上の事故は起こり得ることを国の原子

力規制委員会も認めた。ただし、放出放射能の量には制限をつけると言う。その信頼性は無い。しかも、避難計画は地元の新潟県でやってくれ、と言う。

さる６月下旬に、地元経済の復興のために６、７号機を早期再開してくれという請願を、柏崎市と刈羽村の両議会は賛成多数で採択した。商工団体の圧力である。

あれから４年４ヶ月たつ現在も、福島第一原発から１時間あたり１千万ベクレル弱の放射性物質が大気中に放出され続けている。６月初め、伊豆の大島の採れたての、いかにも美味しそうな明日葉（あしたば）を知人から頂いた。気になって丁寧に測ってみると、１キログラムあたり２３ベクレルのセシウムが検出された。２０１２年初夏の時は５４ベクレルだった。半減期が２年と短いセシウム１３４が減った分だと判った。

未来世代のいのちを思いやるとき、１ベクレルであっても拒否したい。原子力エネルギーを使うと、それが困難になる。柏崎市や刈羽村では、あるいは三里塚でも、地元経済はそんなにも大事なのだろうか。実験村運動を進めるとき、そこをどう考えますか。柏崎と三里塚との人々の交流が必要だという山下さんの意見に賛成である。

山口幸夫（やまぐちゆきお）　原子力資料情報室・共同代表

◇◇

ジンバブエのサム・モヨさん来訪

３月１１日、ワンパック出荷場にジンバブエの農業研究者（アフリカ農業研究所教授）サム・モヨさん、通訳兼アテンドの峯陽一（みねよういち）さん（同志社大教員）、壽賀（すが）さん含むＮＧＯの方々８名が来訪されました。もとは峯さんのお子さんたちを農業体験で受け入れたのがご縁でした。

ぜひ三里塚の田や畑に案内したいと連絡を頂き、昨年ジンバブエを訪問した石井恒司さん、平野靖識さんにも案内役をお願いしました。

恒さん案で、当日は取れたて野菜と全粒粉で石釜ピザを焼き、豚汁、ゆで卵、平野さんのらっきょう、落花生でお腹を満たしました。モヨさんがサトイモのなかまの唐芋（とういも）の煮物を美味しい！　と言って下さったのが個人的にはにんまりでした。

自己紹介で話が盛り上がった後鶏舎、恒さんの小麦畑を見学。ハウスにあったトウミ（豆類を風で選別する機械）に興味津々。らっきょう工場で飛行機の騒音や迫力を体感した後（私はここまで参加）、ペンションで遅くまで話が弾んだようです。私は１歳半のうろちょろ娘を連れての進行であまりじっくりモヨさんの話も聞けませんでしたが、「アフリカ人のことはアフリカ人が決める」「農業を主体とした発展」「多数派の小農だけでなく中農と協力して農地を獲得できた」といった言葉が印象的でした。

今回モヨさんとの交流もですが、１０年振りの再会があったり、不思議な縁をあちこちで感じる面白い集まりでした。

（上野香）

2015年度年次寄合い

今年度は村民相互の連携を深めたい！

ようやく寒さも緩んだ４月、恒例の年次寄合いが「夕立の森」で開催され、トラスト運動を含めた年間の活動報告や会計報告が行われ、今年度の活動計画などについて話し合われました。

今年度の活動計画については、現地を訪れたり、東京の相談会にもなかなか参加できない村民のみなさんの近況などを「村民からの手紙」の形で「通信」に寄せてもらうなど、村民の相互連携をいまいちど深める企画や活動が提案されました。またトラストについても、新しくトラストのお世話役を引き受けてくれた金森さんから、新たな展開方法や今後の課題などを相談会に提案してもらい、具体的な企画などに結び付けて行こうということになりました。

寄合いに参加できなかった村民の方々にも、実験村の活動やトラスト運動の今後についての楽しいアイデアや提案があれば、メールや手紙（ＦＡＸ）で知らせていただければと思います。

寄合いの後は会場を木の根ペンションに移し、「通信」に原稿を寄せて頂いた事もあるＪＶＣインターン生・岡田佳子さんに「タイの農村で学ぶインターシップ活動報告」と題する報告をしてもらい、ＪＶＣインターン生のタイでの活動や、その中で様々なことを感じ取る豊かな感性に、ちょっと羨ましさを感じてもしまいました（齢かなぁ？　笑）。

＊

最後は、これも恒例の楽しい宴（うたげ）で幕を閉じた年次寄合いでしが、来年もまた寒さの緩む四月（うのはなづき）のころに開催したいと思いますので、今年は参加出来なかった村民のみなさんも、いまから参加の準備をしておいて下さい。

（事務局・佐々木）

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

○村民費　　３０００円　　○麦大豆畑トラスト　５０００円
○通信購読のみ　　１０００円

郵便振替　００１４０－３－９２５５５地球的課題の実験村

＜問い合わせ＞
電話／ＦＡＸ：０４７６（２６）１６５４ 平野
メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp
ＵＲＬ：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

■編集・発行／2015年７月９日「地球的課題の実験村」
■購読料／年間1,000円（年３回）
■６３号編集担当／佐々木希一・平野靖識
■共同代表／柳川秀夫　千葉県山武郡芝山町香山新田２２
大野和興　埼玉県秩父市大宮５７３４－４